

英国聖公会の聖礼典からウェスレーを解釈する

—D.G. Dix. *The Shape of the Liturgy* に基づいて—¹

野村 誠

ウェスレーの聖礼典理解を英国国教会(聖公会)の視点から考察し、その特色を考えてみたい。ウェスレーは生涯、英国国教会の聖職者であった²。初期メソジストのグループである **Holy Club** は **Oxford** 大学の中での会であった。それゆえウェスレーの聖礼典理解も聖公会の影響の中にあっただと思われる。英国聖公会の古典的教科書ともいわれている、**D.G. Dix** の **The Shape of the Liturgy** は聖礼典について論じている。そこで **Dix**³ の本書から英国聖公会の聖礼典の理解をどうしてウェスレーの聖礼典を学びたいと思う。

Dix は聖餐式について以下のように考えている。聖餐式は全世界が神に至る道をつねに所有している⁴、そして教会は四福音書が書かれる以前に、まさに福音の縮図である聖餐式において形成された⁵。またキリスト者の礼拝は、きわめて公的 (**corporate**) なものであるが、しかしそれは公 (**public**) ものではない⁶。それゆえ、たとえ名ばかりのクリスチャンの世界においても

聖餐式は、つねに「神の家族」として、個人的、家庭的な集会としての性格をいかばかりか持っている⁷。古代ローマの聖餐式では死者のためのとりなしの祈禱が執り行われていた⁸。メソジスト教会が英国国教会から独立する以前の初期の会合では、グループ内での **society** で聖餐式は愛餐会として行われていたことを **Dix** は指摘している⁹。

杯とパンの交わりはすべての献身的な行為を思い起こさせるだけでなく、来るべき時まで、「我らの主の贖いの死」の儀式を提供する¹⁰。そして、これらの「パンの愛餐」はそれ自体、あらゆるところでキリスト者個人としてでなく、キリスト者の共同体社会の本質的儀式を表している¹¹。

もし人がキリスト教の本質は「信仰のみによる義認である」と主張するならば、洗礼や聖餐式のような物素による儀式は、時代とともに単なる理論となり、伝統と人間性の必然により、「随意の付加物」として困惑のうちに何らかの形の保存ですら退化し倫理的敬虔として形骸化してしまっただろう¹²。

キリスト者にとって迫害時に、聖礼典は公同の教会の生命をささえているばかりでなく、個人の魂の宗教的生命を保持した¹³。聖餐式は、本質的に「罪のうちにある世」から「分離した」聖なる教会という理念を表している。そして聖餐式は、その行為自体に生きて燃える信仰があるゆえ、教会と人の魂にとって重要なのである¹⁴。

実際、キリスト者は聖餐式に「学ぶために」来るのではない、というのはすでに信仰は前提されているからであり、むしろ神との交わりに参与し、経験するために来るのである¹⁵。聖餐式を執り行うことは、主の命令であり、さらに教会の祭司的行為である¹⁶。このすべての儀式は、最後の晩餐ではなく、神の前におけるキリストの犠牲の死と復活を思い起こして明示すること

⁷ **Ibid.**, p.16.

⁸ **Ibid.**, p.43.

⁹ **Ibid.**, p. 50

¹⁰ **Ibid.**, p.59.

¹¹ **Ibid.**, p. 62.

¹² **Ibid.**, p.71.

¹³ **Ibid.**, p.80.

¹⁴ **Ibid.**, p.151.

¹⁵ **Ibid.**, p.153.

¹ この論文は 2006 年 9 月に開催された「日本ウェスレー・メソジスト学会」で口頭発表したもの修正加筆である。

² “A Minister of the Church of England”, Wesley, Works vol.6:408. Sermon Lxxv “On Schism”.

³ Dom Gregory Dix. *The Shape of the Liturgy* (London : Dacre Press, 1945, 1975) .

⁴ **Ibid.**, p. xii.

⁵ **Ibid.**, p.4.

⁶ **Ibid.**, p.16.

である¹⁷。

Dix は聖礼典の基を地上ではなく天上に置き、「天に一つの祭壇があり、そこへ我らの祈りや、パンとぶどう酒 (**oblation**) が献げられる」と言うエイレーナイオス (**Irenaeus**) のことばを、われらは思い起こすと述べる¹⁸。聖礼典の儀式はその意味が、祈りのことばによりあきらかにされる¹⁹。

聖餐式は、「わたしの記念として」という我らの主、御自身からあたえられた「このように行いなさい」という特別の意味を持つ行為である²⁰。その聖餐式の儀式の意味することは、聖餐式での祈りによって決定される²¹。聖餐式の献げものに対して、キリストの生きたことばとしてのことばそれ自体に聖別の力は帰属している²²。

聖餐式での「わたしの記念として」ということは、神の前でキリストの一つの儀式が完成したことを思い起こすこと、また、ここで、今、贖われたものの魂に、十分な効力が働くということが、祈りの伝統のよって示されている。それは、罪のゆるしと軽減、死人の復活と天における新しい命の希望である²³。

Dix は、聖餐式 (**Eucharist**) における大祭司キリスト (**High-priest**) の思想を、教会教父クリュソストモス (**Chrysostom**) の教えを基にして聖餐式における犠牲とキリストの犠牲の関連について論じている。キリストの体は、多くの異なった場所で献げられるとも、分割されることはなく一つの体であり、多くの体ではないと述べる。ひとりの大祭司 (**one-High-priest**) は、われわれを清める犠牲を献げるキリストである。我々はかつて献げられたものを記念として献げる²⁴。「わたしの記念としてこのように行いなさい」と命じられたことである。

我々は昔の大祭司と異なった犠牲を献げているのではなく、むしろ同じ犠牲を記念として献げているのである²⁵。ニカイア公会議 (**325** 年) 以前の教会にとって聖餐式で、教会の犠牲とキリスト、奉献者の結合 (というのは彼の体である教会をとうして献げるのは、我々の大祭司キリストである) は、明らかに一つであり、献げものは一つ(というのは、献げられるのは彼が献げた彼の体、血であるから)、働きは一つ(我々を清めるところの)、——それは古代聖礼典神学の基礎であるキリスト御自身の犠牲とともにある聖餐式の離し得ない結合である²⁶。もし教会の行為が、真にキリストの行為であり、教会の献げ物はキリストの献げ物であるならば、キリストの犠牲の働きは、現在の聖餐式の献げ物を決定している²⁷。オリゲネスは、教会は苦難を受け、甦った肉の体「真の、かつ、より完全なキリストの体」であると語る²⁸。キリストの体なる教会は、自らキリストの献げられた体とするため、聖礼典として差し出す。そのことにより教会自体が時間の内に入り、永遠の実在として、神の前に、キリストに「十分」かつ「満たされた」ものとなる。すなわち、贖われた者は、洗礼と堅信によって生きたキリストの体の肢体となる²⁹。贖われた者の国自体が、聖徒の交わりと集会が、大祭司によって、神に全世界的犠牲 (**an universal sacrifice to God**) として差し出される。さらに大祭司は、彼自身を我々に対して、僕の型によって苦難のうちに差し出された。かくして弱さ、貧困、罪の中にあるまま我々は、キリストにより贖われた者であり、多くのものが一つになる偉大な頭の体となる、このことを教会が信者にとって新しい祭壇の聖餐式において祝う、それゆえ教会が献げることにおいて、教会自らが同時に、神に差し出されていることを示している³⁰。聖礼典においてわれらが受ける霊的恵みは、肉体の罪、弱さとともにある我々がキリストの神秘的体との結合に参与するという³¹。**Dix** はウェスレーもこの流れの

¹⁶ **Ibid.**, p.162.

¹⁷ **Ibid.**

¹⁸ **Ibid.**, p. 230.

¹⁹ **Ibid.**

²⁰ **Ibid.**, p.238.

²¹ **Ibid.**

²² **Ibid.**, p.239.

²³ **Ibid.**, p. 243.

²⁴ **Ibid.**

²⁵ **Ibid.**

²⁶ **Ibid.**, p. 244.

²⁷ **Ibid.**, p. 246.

²⁸ **Ibid.**

²⁹ **Ibid.**, p.247.

³⁰ **Ibid.**, p.248.

³¹ **Ibid.**, p.248.

中にある³²と言及する。聖餐式における地上の教会の行為は、歴史の中で神の御座の前の祭壇で、天上の大祭司 (**the High-priest of the heavenly altar**) としてのキリストの行為、永遠の弁護と取り成しの犠牲を示している³³。地上の聖餐式は、天上の祭壇での大祭司としてのキリスト御自身の行為である。聖餐式は三位一体の交わりの回転 (**revolves**)となる³⁴。キリストは犠牲の供え物として自らを献げ、祈り、聖別する³⁵。聖餐式は第一位格の父なる神、キリストは三位一体の第二位格の行為、聖霊を第三位格の働きとして三位一体論の中で理解される³⁶。東方教会の流れにそって、聖別(**consecration**)は三位一体の第三位格の行為であり、「聖別の祈祷」(**petition for consecration**) が「聖別の瞬間」を示す³⁷。

かくして聖餐式の司祭の働きは、キリストの行為の代理である、聖餐式が天上の礼拝の地上における写しであるからである³⁸。

Dixはウェスレーが、聖餐式に美しい讚美歌を導入し、4世紀のアムブロシウス(**Ambrose**)やアウグスティヌス(**Augustine**)時代の初代教会の伝統であった聖礼典の中での聖歌の音楽を再興したと指摘している³⁹。まさに初期メソジスト教会は聖餐式の復興運動として起きたのである。

バプテスマと聖餐式の聖礼典は、我々が正しく用いるならば、キリストの神性に我々があずかることを可能とさせ、キリストとわれらは一つとなりキリストの不死と永遠の命を我々に参与させる⁴⁰。キリストの完全な犠牲の献げものは、キリスト御自身であり、父なる神に献げられ、地上のキリストの体としての教会は、聖餐式をとうして彼の永遠の大祭司としての行為に参与することをゆるされる⁴¹。

³² **Ibid.**, p.250.

³³ **Ibid.**, p.251.

³⁴ **Ibid.**, p.253.

³⁵ **Ibid.**, p.293.

³⁶ **Ibid.**, p.301.

³⁷ **Ibid.**, p.302.

³⁸ **Ibid.**, p.414.

³⁹ **Ibid.**, pp.494-5.

⁴⁰ **Ibid.**, p. 651.

⁴¹ **Ibid.**, p. 666.

まとめると、**Dix**は、聖餐式は、三位一体なる神の内部における交わりの行為であり、天上の祭壇で第一位格の父なる神に、第二位格の子なるキリストが、永遠の大祭司として御自身を犠牲の供え物として献げ、第三位格の聖霊が交わりとして働く、物素のパンとぶどう酒は聖別の祈りによってキリストの肉と血に変えられる。地上の教会はこの交わりをとうしてキリストの聖なる体となる。聖餐式に参加する信徒はキリストの体の肢体として信仰の生命が強められ三位一体の神の交わりに招かれる。キリスト教の生命は聖餐式を中心にして成り立っているのである⁴²。

ウェスレーの聖餐論

ジョン・ウェスレー (**John Wesley,1703-1791**)は、18世紀英国の英国産業革命期にメソジスト教会を形成しメソジズム運動を組織し指導した。ウェスレーの神学思想の本質は神秘的なサクラメンタル(聖礼典)などところにある。神秘的なサクラメントに豊かな霊的な信仰の源があり、そこから生き生きとした宗教的な活力が与えられて人々は生かされていったのである。18世紀英国の宗教復興の源は聖餐式でのキリストと人々との出会い交わりにあるという視点でウェスレーの神学思想を考察した。

ウェスレーのキリスト論には深い豊かな内容が展開されている、永遠の犠牲の大祭司キリストを中心に特色がある。そしてサクラメントの主体は大祭司キリストにある。しかし残念なことにウェスレーはキリスト論をまとめて著していないので説教集や詩、パンフレットなどから断片的に集めて推測せざるを得ないという限界があることを初めに述べておかねばなりません。ウェスレーにとって聖餐式の主体は、大祭司キリストである。そこで大祭司キリストを中心に述べる。そのことで聖餐式についての**Dix**の理解とウェスレーの思想の流れが解明されるのではないかと思う。

ウェスレーは大祭司キリスト論をブレヴィント博士 (**Dr. Brevint**)からの

⁴² **Ibid.**, p. 396.

引用である「キリスト教の聖礼典と犠牲」⁴³から説明している。ブレヴィント博士は高教会派で「カロライン神学者」であり、ウェスレーのサクラメント論に深い影響をあたえた学者である。次に引用する。

キリストは、全人類の代表として、この偉大な神殿である世界で、神に自らを献げられた。キリストは裁断に自発的犠牲として、また手を頭の上に載せることで、人間のすべての罪を負わせられた神のイスラエルとして現れた。それゆえ、贖罪を求めるものは、犠牲を待望せねばならない。そして永遠の救いを求める者はだれでも、この永遠の祭司と犠牲が、神自身に献げられることを喜ばれる場所、十字架、祭壇で待たねばならない⁴⁴。

ウェスレーは大祭司キリストの犠牲を、神殿としての世界から、人類を代表して罪を負い、自らを犠牲の供え物として神に献げ、罪の贖いを完成したと理解している。

おお汝、永遠に屠られし犠牲
罪人のための犠牲よ、
永遠の聖霊によって、
罪人のために献げられた
我らの永遠の祭司(**everlasting Priest**)は、汝なり、
そして今も汝の死は、罪びとのための
嘆願なり。(H.L.S.5 : 1/Hymns on the Lord's Supper)

聖餐式においてキリストは犠牲の大祭司 (**Priest—Victim**) で、大祭司である

⁴³ Dan Brevint, *The Christian Sacrament and Sacrifice, by way of Discourse, Meditation, and Prayer, upon the Nature, Parts, and Blessing of the Holy Communion* (Anno Dom: At the Theater in Oxford,1679).

⁴⁴ John and Charles Wesley, *The Poetical Works of John and Charles Wesley* (London : Wesleyan Methodist Conference Office, 1869) 3:207.

キリストが自らを、神に献げるといふ、神の三位一体の交わりの中で理解されている。

さらに「天上の大祭司」は同時に「犠牲の小羊」である。

永遠の犠牲の小羊 (**the ever—slaughter'd Lamb**)
汝は、永遠に屠られし小羊 (**the ever—slaughter'd Lamb**)
汝の祭司職は、今も変わらない。(H.L.S. 5 : 2)

汝、まことの過越しの小羊、
その血は我々のために流された。
その方を通して、我々はエジプトから脱出した。
汝の贖われた人々を導きたまえ。(H.L.S. 51 : 1)

この「過越しの小羊」のことを「イエスは、我らの贖いの小羊」(H.L.S. 74 : 1) とウェスレーは述べている。「神の過越しの小羊 (**Pascal Lamb of God**)」(H.L.S. 35 : 1) の贖いによって、われわれは罪のくびきである「エジプトから脱出した」のである。この「過越しの小羊」は「我らの清めの神 (**Our sanctifying God**)」(H.L.S. 4 : 1) としてのキリストを意味している。この「小羊」のメタファーが、「永遠の大祭司」である。

天上にいます永遠の大祭司キリストは、今もなお引き続き働き、我らの贖いのためとりなしている。「彼はひとたび死んだが、永遠にとりなしている」(ヘブル 7:25 『新約聖書註解』)とウェスレーは述べている。

生きよ、我らの永遠の祭司、
人々と天使に祝されて!
受苦者イエス・キリスト、
我々を贖った方は、
一度死んだ十字架から、
今や天に昇られた。(H.L.S.118 : 1)

キリストは、キリストの体なる教会 (**Corpus Christi**) をとおして今も働いておられる。キリスト者は、キリストの神秘的体なる教会 (**Corpus Christi Mysticum**) をとうして大祭司キリストの祝福のうちに、神の交わりの中に受け入れられる。

キリストと教会は、一つの献げものになり、天にのぼることのできる者すべてを献げ神をなだめ喜ばす (**Poetical Works, 3 : 208**)。

人はキリストの体なる教会のなかで、聖餐式において、永遠の大祭司キリストにより、キリストの犠牲とともに、天の神への献げものとなりキリストの贖罪の犠牲に与かることにより神の祝福を受け、聖化される。

ウェスレーの聖礼典理解は聖公会の影響の中にあつたと思われる。ウェスレーの聖餐論は、高教会派で「カロライン神学者」であつたブレヴィント博士の論文から引用するなど、英国国教会の流れの中に聖公会の神学のなかにあつたと言えよう。ウェスレーは聖礼典をアングリカンの伝統の中で位置づけていたが、国教会の聖堂の中から **liturgy** を大衆伝道のために恵みの手段として用い、**liturgy** において民衆はキリストに出会い祝福を受けたのである。

今回は特に聖餐式における大祭司論に焦点をあてましたが、**Dix** は聖餐式と **Anamnesis**、終末論、神の国、預言者キリスト、なども著書では展開している。それらの教義がウェスレーにも継承されていることはいまでもありませんが、今回は省きました。ウェスレーの聖餐式と **Anamnesis**、終末論、神の国、預言者キリストなどについては、拙著『初期メソジズムの本質』、『聖餐論 J. ウェスレーによる』、『ウェスレーの神学思想』などで論じていますので参照してください^{4,5}。

(共愛学園 前橋国際大学 野村 誠)

^{4,5} 拙著『初期メソジズムの本質』(新教出版出版事業部 1978年)、拙著『聖餐論 J. ウェスレーによる』(シオン書房 1990年)。

『ウェスレーの神学思想』(白順社 1998年) 聖餐論 pp.69-98、大祭司キリスト論は pp.259-266.などで論じていますので参照ください。**Dix** の **The Shape of the Liturgy** において、聖餐式における想起 (**Anamnesis**)、終末論(**Eschatology**)の概念については **Chapter IX, pp.238-267** で展開されている。